故郷 (3)

（三十年ほど前、「私」は閏土(ルントー)と知りあい、仲よくなりました。）

そのとき何をしゃべったかは、おぼえていない。ただ閏土が、※城内へ来ていろいろ珍(めずら)しいものを見たといって、はしゃいでいたことだけは記憶(きおく)に残っている。

あくる日、鳥を捕(と)ってくれと頼(たの)むと、かれは、

「だめだよ。大雪が降ってからでなきゃ。おいらとこ、砂地に雪が降るだろ。そうしたら雪をかいて、すこし空地(あきち)をこしらえるんだ。それから、大きな籠(かご)を持ってきて、短いつっかえ棒(ぼう)を※かって、くず籾(もみ)をまくんだ。そうすると、小鳥が来て食うから、そのとき遠くのほうから、棒にゆわえてある縄を引っぱるんだ。そうすると、みんな籠から逃(に)げられないんだ。何だっているぜ。※稲鶏(タオチー)だの、角鶏(チアオチー)だの、鳩(はと)だの、藍背(ランペイ)だの……」

それからは雪の降るのが待ちどおしくなった。

閏土はまた言うのだ。

「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来るといいや。おいら、昼間は海へ貝がら拾いに行くんだ。赤いのも、青いのも、何でもあるよ。※『鬼(おに)おどし』もあるし、『観音(かんのん)さまの手』もあるよ。晩には父ちゃんと①西瓜(すいか)の番に行くのさ。おまえも来いよ」

「泥棒(どろぼう)の番？」

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉(のど)がかわいて西瓜を取って食ったって、そんなの、おいらとこじゃ泥棒なんて思やしない。番するのは、あな熊や、はりねずみや、猹(チャー)さ。月のある晩に、いいかい、ガリガリって音がしたら、猹が西瓜をかじってるんだ。そうしたら手に刺(さす)叉(また)をもって、忍(しの)びよって……」

（中略）

「咬(か)みつかない？」

「刺叉があるじゃないか。忍びよって、猹を見つけたら突(つ)くのさ。あん畜生(ちくしょう)、りこうだから、こっちへ走ってくるよ。そうして股(また)をくぐって逃げてしまうよ。なにしろ毛が油みたいに滑(すべ)っこくて……」

こんなにたくさん珍しいことがあろうなど、それまで私は思ってもみなかった。海には、そのような五色(ごしき)の貝がらがあるものなのか。西瓜には、こんな危険な経歴があるものなのか。私は西瓜といえば、②果物屋に売っているものとばかり思っていた。

「おいらとこの砂地では、高潮の時分になると『跳(は)ね魚』がいっぱい跳ねるよ。みんな蛙(かえる)みたいな足が二本あって……」

ああ、閏土の心は神秘の宝庫で、③私の遊び仲間とは大ちがいだ。こんなことは私の友だちは何も知ってはいない。閏土が海辺にいるとき、かれらは私と同様、高い塀(へい)に囲まれた中庭から四角な空を眺(なが)めているだけなのだ。

惜(お)しくも正月は過ぎて、閏土は家へ帰らねばならなかった。別れがつらくて、私は声をあげて泣いた。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。
一部表記を変えた箇所がある）

※城内…町の中。中国では町全体が城壁に囲まれていた。
かって…支えにして、つっぱりにして。
稲鶏だの～…いずれも鳥の名とされるが詳細不明。
『鬼おどし』～…鬼おどし・観音さまの手、ともに貝がらの名とされるが詳細不明。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「西瓜の番」とあるが、これはどのようなことをするのか。適当なものを選びなさい。

ア　泥棒が西瓜を取って食べないように番をする。
イ　あな熊などが西瓜をかじらないように番をする。
ウ　果物屋に売られている西瓜を見張る番をする。

〔　　〕

(2) ――線②「果物屋に売っているものとばかり思っていた」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア　西瓜は果物屋に売られているものだと勘違い（かんちがい）していたということ。
イ　果物屋に売られていなかったので、西瓜を知らなかったということ。
ウ　西瓜を果物屋に売っているものとしてしか見ていなかったということ。

〔　　〕

(3) ――線③「私の遊び仲間とは大ちがいだ」とあるが、どのように違うのか。適当なものを選びなさい。

ア　閏土が珍しいことをよく知っているのに対し、「私」や「私」の遊び仲間は狭（せま）い世界のことしか知らない。
イ　閏土や「私」の遊び仲間がいろいろなものごとに詳（くわ）しいのに対し、「私」はものごとの経験が少ない。
ウ　閏土や「私」が裕福（ゆうふく）な暮らしをしているのに対し、「私」の遊び仲間は経済的なゆとりがない。

〔　　〕